

クルバン・ワリー編

ウイグル、ウズベク、
タタール古籍目録

新免康

「東トルキスタン」（現在の中国の新疆ウイグル自治区）は、中央アジア、トルコ—イスラム世界の一部として独自の社会・文化を開拓・成熟させてきた。しかし、それを研究するための基本的な材料となる古典的文献に関しては、当地に纏まつた形で残存しているのか、どのような文献があるのか、などについて、明確な情報がないという望ましくない状態が続いていた。この状態を一気に払拭したのが、ここに紹介する『ウイグル、ウズベク、タタール古籍目録』（現代ウイグル文）である。

当書は、新疆ウイグル自治区少数民族古籍収集・整理・出版規画領導小組弁公室（以下、自治区古籍弁公室と略称）が収集し、保管している「古典著作」の目録である。所載文献の使用言語は、チャガタイ、ペルシャ、アラビア、タタールの各語、及びこれらの組み合わせである。現代ウイグル語のものはない。一九八三年に設立された自治

区古籍弁公室については、梅村坦氏による紹介がある（「新疆社会科学院と天山諸地域」（一九八八年第二五回野尻湖クリルタイプ頭発表）。新疆在住各「少数民族」の文献の収集、整理、目録作成、現代ウイグル語への翻訳・出版に当たっている。主任は、当目録編集者クルバン・ワリ一氏である。

当書を紹介するに際しての困難は、目録に収録された文献の大部分を実見できず、当書の記載事項をもとの文献に当つて確認することができないということである。したがつて、この紹介は原則的に不完全なものとならざるを得ない。しかし、当目録を紹介することの意味はけつして小さくない。新疆で組織的に収集されたチャガタイ語、ペルシヤ語、アラビア語の文献が整理され、その本格的な目録が出版された」とは、まさに画期的と言えるからである。

確かに、「文化大革命」前、数千点のチャガタイ語写本文がウルムチに収集されたといふ（Masami HAMADA, "Un Aperçu des Manuscrits Çagatay en Provenance du Turkestan Oriental", *Documents et Archives Provenant de L'Asie Centrale*, Kyoto, 1990, p.103）。しかし、それらに関して、我々の目に触れ得る形で網羅的な目録が出版され、文献の細目が鮮明になつた訳ではない。それらの文献が現在どうなつてゐるのか、確かな情報も存在しない。

「文化大革命」で何らかの破壊を被つたことは間違いない。したがつて、当目録の編集・出版により、新疆ウイグル自治区にこのように多量の古典書が現存することが明確に確認され、その具体的な姿を把握することが可能になつたことは、極めて意義深い。

幸い私は、梅村坦先生や章瑩先生のご助力により、編者クルバン・ワリー先生に直接お会いして、目録上で述べられてること以外に、当書に関する若干の情報を得ることができた。以下、「編者の言によれば」とあるのは、編者から私に対する直接の情報である。

当書の収録文献総数は、五五六件、分野別編成である。分野とその文献数は、文学・芸術 五四四、歴史・地理・伝記 一四六、宗教・哲学 五五五、文化・教育 一五二、天文学・曆法 三三、法律 三五、医学 四四、小冊子 (risala) 四七、となつていて。各々の分野ごとに、言語の種別に関わりなく、ほぼ題名の現代ウイグル文字のアルファベット順に配列されている。

文献に関する書誌的情報は、X K Q番号、著作名、著者名、著作年 (翻訳年・書写年も記載)、冊子のサイズ (横×縦 cm)、頁数、使用言語、筆写・印刷の別 (種類)、内容の簡単な紹介 からなる。全て現代ウイグル語表記である。叙述的具体例を一文献分のみ掲げてみよう (一一一一页)。

X K Q／一五五〇 Mahtum ئازام تەكىرىسى
著者は明らかでない。著作年時は明らか：ヘジュラ暦一四一年①。判型：一三×二一印、一〇六頁。

ペルシャ語、手写。

著作には、マフトゥム・アザム (Maftuum-ı A'zam
—評者注) の伝記が記述されてゐる。

①西暦：一七二一—一七二二年。

X K Q というのは、編者の言によれば、Xinjiang Kedimkureseli, Qarapatalawmiliikler (新疆古典著作、チャガタイ時代著作) の頭文字である。番号は、自治区古籍弁公室への登録時の順番を示している。著作年がヒュラ暦表示の場合、西暦年が註される。

当目録の収録対象は、前述のように、自治区古籍弁公室所蔵の文献であるが、これについては若干の説明を要する。まず、それは、「著書」の形になつているもののみである。刻文、文書資料 (戸籍、土地関係文書、ワクフ文書) などは含まれない。編者の言によれば、これらの資料も少なからず収集されているが、鑑定・登録・整理・研究はまだ行なわれていない。ちなみに、現在、自治区古籍弁公室収集の資料は、二〇〇〇点を越えている。また、当目録の収録対象は、自治区中央の古籍弁公室の文献のみである。新疆各地には、専区・州といった各行政単位ごとに古

籍弁公室がある。それらが収集した文献の登録・鑑定・研究作業は完了しておらず、その目録も以下のところ刊行されていない。自治区古籍弁公室は、各地の古籍弁公室と緊密な業務的連係をとりつつ、総体的な企画を遂行しているという。

目録中では、文献がどのようにしていつ自治区古籍弁公室にもたらされたのか、殆ど触れられていない。しかし、編者の言によれば、弁公室では、それを個々の文献に関して逐一記録している。収集の具体的な方法としては、新疆各地に係官を派遣して購入する、或いは、民間で出版されたものを購入して郵送するという手法が採られたといふ。なお、寄贈による資料も存在する。例えば、X K Q 八三三、X K Q 八三五 (*Tarikh minnayi*)、X K Q 八三七、X K Q 八七一 (*[タタールロシア語辞典]*) は、ブルハン (初代の新疆省人民政府主席) からの寄贈本である。文献の収集時期は、「文化大革命」以後である。それは、当目録序文に、「多數が、今世紀の初頭に外国の探検者たちによって「収集」され、諸外国に持ち去られた。いわゆる文化大革命で、損失に遭遇した。このような事情にも拘らず、人民の中に依然として少からざる著作が保存されている」とある通りである。

ところで、我々にとっての最大の関心事は、目録に掲げられた文献の閲覧・利用の可否の問題である。言うまでもなく、目録の編集・出版の主要な目的は、研究活動等に際し、諸文献の有効な利用を帮助することにある。しかし、編者の言によれば、自治区古籍弁公室の諸部門は、収集された文献に対し目録作成以外の作業を完了していない。したがつて以下のところ、外国人研究者は勿論のこと、新疆大学・新疆社会科学院など、自治区内研究機関の研究人員も、当目録に収録された文献を閲覧・利用することはできない、とのことである。

それでは、当書編纂の目的は何であろうか。序文では、「全民族の人民と知識人が古典的文化遺産の方面において、さらに全面的な理解を達成するよう援助し合い、当目録に入っていない古典著作の収集において継続的にその熱心な支援を得るために」とされており、学術研究に際して、資料利用の便を図るためではない。しかし、次のような編者の意図も軽視できない。「我々の自治区にいる全ての少数民族の古典著作を収集し、整理し、出版すること、また、翻訳して国家と世界に紹介すること」はまさに急務であり、「そのようにしてこそ、我々の文化遺産救出の目的を達する」。そして、全民族の古典著作の内容に関する情報の提供に対する要求を満たすため、「その第一歩として」この目録を準備した、と。要するに、目録出版は、古典的文献

の収集・整理・出版という古籍弁公室の任務の一環として、

これ以後諸民族の文化遺産である古典的文献の紹介といふ

作業を本格的に展開する第一歩と位置づけられている。

自治区古籍弁公室は、目録編纂以外の出版活動も精力的に進めている。歴史関係では、ムハンマド・サードイク・カシュガリー『タズキライ・アズィーザーン』(穆罕麦提·薩迪克『和卓伝』喀什維文出版社、一九八八年)が現代ウ

イグル語表記で発刊された。文学関係では、ナヴァーイー

『ハムサ』も印刷待ちの段階にある。ただし、予定されて

いたミールザー・ハイダル『ターリーヒ・ラシードイー』の

出版は少々難航して、目途が立っていない。また、

最近新疆では、古典的文献の出版活動が盛んである。パン

トウソフ校訂本の現代ウイグル語訳である、ムツラーム・ム

ーサー『ターリーヒ・アムニア』(毛拉·穆薩·賽拉密『安

寧史』新疆人民出版社、一九八九年)さらに、アキムシ

ュキン校訂本に依拠した現代ウイグル語訳である、シャ

ー・マフムード・チョラース『サイディーア・ハーン国に

関する歴史資料』(夏·麻赫穆德·朱拉斯『維吾爾書義德亞

汗国歴史資料』喀什維文出版社、一九八九年)も出された。東トルキスタンの重要な歴史書の現代ウイグル語版が次第に出揃いつつあるという感が強い。当目録出版と併せて、歓迎されるべき現象である。

さて、当書に関する若干の検討を加えよう。

第一に、目録としての体裁については、異なる諸言語の文献の混在や、著者名索引の欠如等を問題点として指摘できる。しかし、前者には逆にメリットもある。また、これらは、当目録を基に文献情報のデータベース化を実現すれば、容易に解消する「不満」であろう。

第二に、書誌的情報の記載についてである。前述の記載

例からわかるように、文献についての基礎的情報は、網羅

されている。若干の遗漏もあるが(例:二六〇頁、X K Q

一四二四の判型)、とるに足りない。ただ、著作名・著者名

が、現代ウイグル文字(アラビア文字の変形)による表記

であり、原文献そのままではない、という点は注意を要する。現在のウイグル人の利用の便を図ったためと思われる

が、元表記の併載が望まれる。他方、文献の内容に関する

記載も、十分であるとは言い難い。すなわち、収録文献と他の文書館・図書館等に所蔵されている文献との関係を註記していない。新疆ウイグル自治区にある資料についてさえ同様である。新疆の各研究機関所蔵のチャガタイ語(ウ

イグル語)ペルシャ語、アラビア語文献に関しては、既に新疆社会科学院宗教所の阿吉努爾·阿吉(Haji Nur Haji)氏が、「維吾爾古籍書目索引」を完成させており、

その部分漢語訳「新疆地区伊斯兰教古籍書目索引」(中国

伊斯蘭教研究文集」寧夏人民出版社、一九八八年)が、七〇点の文献を掲げている。この「索引」にある伊瑪目熱巴尼『買克吐巴提』(五一四頁)は、『ウイグル、ウズベク、タタール古籍目録』にある Imam Rebmani, Məktubat xirif (三九三頁)と、何らかの関係を想像させる。ところが、この事例を含めて『ウイグル、ウズベク、タタール古籍目録』は、自治区博物館、新疆社会科学院等にある文献との関連性について言及していない。ただし、同目録中の文献相互の類似等については、基本的には記載がある。もつとも、その情報も万全とは言い切れない。同様の内容とそれながら、著者や著作年が異なる場合、我々が当然感じる疑問に對して答えるところがないのである(例:三二一—三二二頁、X.K.Q一二八一—一五五五)。さらに、著者に關する説明が全くないことに、若干の不便を感じる。中央アジアの人物であるか否かさえ、自らの知識を引張り出して憶測するしかない。

しかし、少なくとも編者は、「不備」の一部を「不備」と認識している。特に、これらの文献の整理・研究には、ヨーロッパやソ連に所蔵されている文献との比較・考究が必須ではないかとの私の指摘に対し、編者はそのことについて十分自覺的であった。とすれば、当書はむしろ、今後社会に提供していくはずの、より詳細で充実した古典文献

に関する情報を得るための手段と位置づけられる。

第三に、分野別編成の方式についてである。この方式は、当書独自のものである。ソ連所蔵トルコ語写本の目録 Дмитриева, Л. В. и д., Описание Тюрокских Рукописей Института Народов Азии, Москва, 1965, 1975, 1980 も分野別編成であるが、その区分は、歴史(地域別にさらに細分化)、文書、伝記、辞典、地理、暦法、詩学・詩の注釈、詩、となっている。ただ、両者の相違点は、収藏文献の内容のばらつき具合や数量の差異にも由来すると思われる。『ウイグル、ウズベク、タタール古籍目録』の分野設定の大枠は、目録から見たコレクションのありかたから判断するに、概ね妥当と思われる。収録文献を実際に目にできない状況を鑑みると、これ以上のコメントには少々無理があるが、より具体的な側面について二・三指摘しておこう。

各分野に収められた文献の種類を、内容に關する記載に基づいて見ていくと、「文学・芸術」には、詩を中心として、物語、詩の韻律に關する著作などが含まれる。「歴史・地理・伝記」には、ムハンマドや正統カリフの事蹟に關する著書、聖者のタズキラ、我々が言う意味での「歴史書」、「地理書」がある。「宗教・哲学」は、イスラム教の教義、礼拝についての説明、ハディース集、コーラン、易占書、スマーフィズムの学説、護符文、フトゥバ集などであり、狹

義の哲学書は少い。「文化・教育」には、アラビア語文法、正書法、論理学、弁論学、算術法等についての著作、学校(maktab)教材、他著作の注釈書等がある。「天文・暦法」には占星術、「医学」には歯医学、薬学に関する文献も含まれている。

「」で注意すべきは、各分野「」との範疇設定に独特のものがある点である。例えば、イスラム法に関する著作が、「宗教・哲学」項に入っている。「一ハフ(義務)」に関するもの、「ハイクフ」という語を題名にもつ著作まで同断である。すなわち、「法律」項には、実際の法律の運用面に纏わるものしかなく、「」で特に問題となるのは、「宗教」に一体何を含めるかと云うことであらう。イスラム社会では、様々な社会的・政治的・文化的活動がイスラムの名の下に行なわれる。詩作もイスラム神秘主義と切り離しては考えられない。「」の問題を当目録で云々処理して云ふのが、云々ことに関しても、断定的ないことを云うのは難しが、少くとも結果的には、イスラム関連の文献の中から、他の分野に入るものを除外して残ったものが「宗教」に組み入れられて云ふ可能性がある。「」での「宗教」は「神学」などでは毛頭ないものである。

「」のような分類法は、イスラム世界の知的体系に必ずしも沿ったものではない。とは云え、当時の知的枠組に忠実

に従つた分類方式が、目録を利用する上で常に効力を發揮するとも断言できない。いずれにせよ、古典的文献の分野設定には難しい面がある。そういう意味で、アラビア語・ペルシャ語も含め、登録、分野設定、各分野への振分け、内容注記等の作業が困難を越えて遂行されたことは、賞賛に値する。

最後に、当目録を透かして窺つ」といふのである。由治図古籍弁公室所蔵古典著作について、少々述べておきたい。

まず、当目録所載の分野に従つて、その使用言語の構成と文献数の内訳を見てみると、次表のようになる。

分野	言語	チャガ	ペルシ	アラビ	タター	複数	表示なし	計
文学・芸術	346	161	10	18	8	1	544	
歴史・地理・伝記	77	49	13	4	3	0	146	
宗教・哲学	211	179	152	0	11	2	555	
文化・教育	3	22	118	2	7	0	152	
天文学・暦法	25	4	3	0	1	0	33	
法律	5	6	19	0	5	0	35	
医学	22	17	4	0	1	0	44	
小冊子	44	1	1	0	0	1	47	
計	733	439	320	24	36	4	1,556	

個々の分野について見ると、おお、「文学」が際立つた特

徴を帶びている。当地がイラン・イスラム文化の甚大な影響を受けたことは周知の通りであるが、ここにも、ルーミー・ハーフィズ、サーディー等の詩集が多数ある。『シャー・ナーメ』のチャガタイ語訳もある。勿論、このような伝統の上に立つて展開された、ナヴァーイー、ラブグーズイー、ニザーリー、ガリービー等の中央アジア・イスラム文化の精髄も、相当量認められている。一方、ヤサヴィー、ベデイル、マシュラブ・スルフィー・アッラーヤールなどの著作群からは、西トルキスタンにおけるイスラム神秘主義文学の存在の大きさ、その東トルキスタンへの浸透も窺える。もつとも、東・西トルキスタンの区分は、中國・ロシアという政治的枠組の強制による行政的な領域分断と無縁ではない。これらの書き言葉の蓄積の様相は、「西半分」からの影響といつよりも、中央アジアのイスラム文化の広がりと興行きの一環である。ソ連所蔵のものを始めとする、他の文献の蓄積も結合させた上での総体的な分析が必要であろう。これは、タズキラ（伝記）などに関しても言えることである。

「歴史・伝記・地理」の項目には、多くのイスラム「聖者」のタズキラがある。ストウク・ボグラ・ハーンやホージャたち（アッパーク、アルシュ・アルディーン、マフドウミ・アーザムなど）のそれは顯著であり、欧洲・ソ連所蔵

の文献と類似の題名のものも少くない。当地住民の精神世界の探求を進める上でも、まず文献学的作業として、中国所在のタズキラと他国に所蔵されるそれとの比較・考究が望まれる。一方、私自身の関心から言えば、比較的新しい時代の東トルキスタンに関する歴史書が少いという印象を拭えない。一九世紀の政治的事件に関しては、相当量のチャガタイ語の歴史文献が存在する。濱田正美「一九世紀ウイグル歴史文献序説」（『東方学報』五三、一九八三年）、また、Муринов, А. М., Описание уйгурских рукописей Института Народов Азии, Москва, 1962. に見られる反乱に関する史料がそれである。しかし、自治区古籍弁公室のコレクションには、これらの文献と何らかの関連を窺わせる文献、その他の一八・一九世紀關係の歴史文献が至つて数少い。

とはいって、これを以て、歴史研究に際しての当コレクションの意義が低く見積もられてはならない。「宗教」項を参照しても、顕・密両面における住民の信仰生活のありかた、イスラムの内面化や信仰世界の独自性の諸相を探る上で、良質の材料を提供するに違いない。特に、『タリーカティ・ナクシュバンティーヤ』や『リサーライ・カーディリーヤ』等、スルフィズム関連の文献は興味を惹かれる。また、「法律」項には、遺産分与問題等に関する著作のみ

ならず、ファトヴァー集やフクム集もある。チャガタイ語文献の存在を考慮すれば、当地で実際に発せられたファトヴァーの可能性もある。現在まで、東トルキスタンにおけるイスラム法の運用・執行の実態に関しては殆ど資料がなく、それに関する体系的研究も存在しない現状を顧みれば、これらの文献の価値は計り知れない。さらに、「小冊子」項には、農業、牧畜業、商業を始めとして、料理、染物、酒造、裁縫、石鹼・蠟燭製造、ひいては瓜壳りやナン焼きに至るまで、あらゆる業いに関する冊子（ギルドのリサーラ？）があり、各々數十頁、場合によつては数百頁に及ぶボリュームをもつ。伝統的社会の実相を把握する上で、極めて有用であることは疑いない。

以上のように、これらの文献は、東トルキスタンの言語・文化・社会・歴史を研究する上で第一級の価値をもつと想像される。目録自体の価値も比例して高いと言えよ。そして何よりも、当地の社会・文化が、中央アジアのトルコ＝イスラム社会の一部、また、より大きなイスラム世界の一部であることを如実に感じさせてくれる。その複合的で特有の様態は、中国少数民族文化というカテゴリーの仕寄せが通用し切らない世界である。もっとも、当目録がアラビア語とペルシャ語の文献も合体して編纂されている裏に、何らかの深慮遠謀を察知するのは穿ち過ぎであろう。

う。当書が、実際問題として、最近の中国の「少数民族」政策の所産である、といふ点は評価されねばならない。いずれにせよ、当目録に収録された資料を用いた研究活動が、一日も早く可能になるよう祈りたい。それこそが、当目録編纂の労に十分に報いる道となつ。

(Muhammed: Kurban Weli

Mesul muhammed: Sivit Zunun

Xinjiang Uyghur apptonun rayonluk az sanlik millet kedininki eserlerni topnak, relax, nesir kilixni pilan lax rahbarlik guruppa ixhanisi nesing teyyarilgen, Uygor, Ozbek, Tatar kedininki eserler tizimliki, Kaxkar Uygor Naxriyati, 1989-yil (編輯：庫爾班・維力、責任編輯：賽依提・祖農、責任校對：阿依夏木・阿不都吾力)『維吾爾、烏孜別克、塔塔爾古籍名錄』

〔付記〕日本は勿論のこと、ウルチムの店頭でも当書を入手するることは困難である。カシュガルでは手にすることができるはずである。